

父と母と、残り香とお香

長月遊

中学二年のときの、記憶の映像である。

冬ではない。夏でもなく陽射しのそうきつくもない季節、春か秋かのそろそろ時分どきというころ。暮れなずむ空の明るみが室内に届いている。畳の部屋である。姉がそこにごろんと寝ころがり、妹の綴った母親への舌足らずな思いを読んでいる。私は自分の裸を隈なく見られているように恥ずかしくもあり、だがそれ以上に、娘として取り返しのつかない過ちを犯してしまったのではないかしらと、母親への大きすぎる罪の意識に囚われている。机と書棚と小ぶりの筆筒があり、腰窓に面して木製の机が置かれている。私はそこに着いていて、騒ぎ立てる心を持て余しつつ、ペーじをめくる姉を斜から見守っている。その情景が四方の囲みを失くしてあえかに浮きだし、端っこに潜むモノクロームの私の心の中が透けて見える。

娘でありながら母親に向かうときふと抱えてしまう曰く言い難いぎこちなさを、私は五つ齡上の姉の存在に凭れかかってしまうことで不問に付していたのだった。姉は自然

体で母に接していると妹の私はいつも思っていた。その姉に嫉妬したのではない。どこにでもいる普通の女の子でありながら、なぜ私はこうも構えなければ母とあい対することができないのだろうか。それが不可解で、ひどくカタワナコトに感じられ、そんな自分が厭だった。異性である父とはごく自然だった。母親っ子だとか父親っ子だとか一言で括ってしまうえばそれまでなのだろうが、私は不器用にすぎたのか、そんなふうには割り切って考えることができなかった。父親にではなく同性の母親のほうに違和感を覚えてしまう自分自身に本当はずっと大きな違和を感じ、そんな自分を怖い子どもだと思つて扱いかねていた。

大正元年生まれの父は芸者遊びをよくした。四人の子を母に産ませ、自分は独り者の気分です。上三人は抱かなかつたが、末娘の私だけ抱いた。私は父のいない夜によく泣いた。ある夜、ぐずつて寝てくれぬ私を母がおぶり、暗いおもてへ出た。背中の私に子守唄を歌い、歩くともなく歩くうち、私は母の肩に頬をあずけて眠つた。引き返そうとしたら前方の路地から男と女が現れた。女が芸者なのは見るなりわかつた。男が母を見て取り足を止めた。女も男に做つた。男は女を促し、きびすを返した。男は父だった。

小学一年のとき、父はしばしば私を料亭に伴つた。なぜ大人の男の遊び場へ幼い私を伴つたのかそれは謎だが、お

ぼろな記憶になっている。黒髪をどうかしたみたいにこんもり結つた女の顔の白さと、白粉のにおい。帰りの夜道のほの暗さと、つないだ父の手の温もり、そして父の襟に沁みたお酒の匂い。

長兄は東京で社会人、次兄も東京で、姉は奈良でどちらも大学生、私はその年一人っ子の高校生であった。ある日帰宅すると、玄関にあだっばい履物がきちんと揃えられている。客間から母ではない女の声が届いてくる。なにやら甘ったるい調子で父と懸合っているようだ。音を立てぬよう客間と次の間とをへだてている襖に近づいてゆき、膝立ちになって、そろり3ミリほど敷居を滑らせた。すると凝らす間もなく眼に飛びこんできたのは、文金高島田のお嫁さんとお見紛うばかりの頭をした白無垢ならぬ白塗りの女であった。ふと振り向けば母がいた。小声で、「愛ちゃん、ごめんね」ひそりと私に笑いかけた。その母に私は無言で、しかしやはりひそりと笑い返した気がするが、その後ろのことは忘れない。私はひどく悲しくなり、自室の机に突っ伏して泣いた。父のことを不潔だと思つたのではない。あんな芸者、綺麗でも素敵でもない。あれっぽつちの女のくせに。父のことをいつかせよ奪われたのだと思ひ込み、悔しくてならなかった。あんな女に私の父を好きにされてたまるものか。白粉まみれの女を思いの丈蔑み、同時に母と自分を憐れんだ。翌夜、父が神妙な顔で私の部屋に

やつてきた。「愛子、きのうは悪かつたな」。私はやつぱり父が大好きだと思つた。

父の遊びは五十近くなつてようやく鎮まつた。ずいぶん身勝手な人だけど私にも優しい。そう言っていた母はよく白檀のお香を焚いていた。盛夏は単服だったがあとには和服で、夫のため、四人の子どものために、白い割烹着をつけて立ち働いていた。そしていつも不意に思いついたように茶箆筒のまえに立ち、お香を焚いた。そのときの母の顔つき、剣難だった。父も母もとうに他界したが、当時のふたりが幼く感じられるほど齢をとつた今、私は思う。あれは父の背広に染みだした移り香を消したかつたのだ。

子の母ならば当たり前だろうけれど、私の母も四人の子も分け隔てなく愛し、父への内助の功もよくできていて、だから良き妻であり良き母だと思つていた。そしてそのうなのだったから、きつと私のほうで心の中のどこかに本来あるべき大切なパーツを欠損して生まれついたのでに相違ない。本気でそんなことを考えていた。少女の私には、不可視ゆえに不測のモノには個性というやはり不可視・不測のモノで対処し、たとえ割り切れなくともやり過ごせばいいのだという知恵がまだ働かなかつた。

父の背広に染みついた移り香を消したくて母が焚いていた白檀。きょうも私は焚いた。